

黄美娥著

重層現代性鏡像

——日治時代台湾傳統文人的文化視域与文学想像

台北：麦田出版／2004年12月／397頁／420元



森岡ゆかり

近代台湾漢文学は、次に到来した新文学から批判され、乗り越えるべき対象とされ、負の評価を背負わされてきた。本書の作者黄美娥氏も、「台湾文学史は、新文学の側から書かれている」という。この台湾文学史に対する批判と反省が、彼女を台湾漢文学の位置づけや役割を丁寧に再考するという作業に向かわせた。著者の定義によれば、「伝統文人」とは「伝統文学」（文言文、漢詩、文言小説）を生涯自らの創作活動の中心に据えていた人々のことである。また、本書において、「現代性」(Modernity)、日本語では「近代性」あるいは「モダニティ」と訳出される)は、台湾の「近代」と重なる日本統治期に生きる台湾伝統文人の思想と文学を映しだす鏡としての役割を担っている。

本書は七編の論考と付録一篇の、あわせて八編の論考から構成されている。以下、各論の概略を述べておく。

序論

日本統治期台湾の伝統文人の思想と時

代精神の分析という著者の研究課題を明らかにし、各章の要約をしつつ本書の全体像をあらかじめ提示する。加えて、「伝統文人」、「近代性 (Modernity)」についての著者の観点を説いている。

第一章 迎向現代——台湾新、旧文学的承接与過渡 (一八九五—一九二四)

兩岸の台湾文学史においてすでになされている歴史叙述の中で、近代における伝統文人、漢文学の存在が見落とされてきた。しかし、伝統文人や漢文学は、台湾新文学を創出する触媒としての役割を担っていた。文人たちの中には、白話文運動や新旧文学論争の起きる以前に、新しい時代、新たな社会文化に対応すべく、改革を試みる者もいたのである。詩歌の内容の改革や散文の改革、小説、戯曲の改革を推し進め、また海外の思想を台湾に移植する仲介役を果たしたことを具体的に事例を挙げて論じる。

第二章 対立与協力——新旧文学論戦

中伝統文人の典律反省及文化思惟

(一九二四—一九四二)

本章は、一九二四年から一九四二年の各時期の新旧文学論争とその文化背景について旧文学の側から考究を深めたもの。硬直した対立が続くことになったのは、伝統と現代、西洋と東洋、漢学と新学の対立に対する評価や解釈が新文学側と旧文学側で異なっていたからだが、新旧の文人たちは思想的には接近していた。四〇年代に入ると、新旧双方の文学者たちの中から国策に応じる言論を発表する者が現れ、新文学者たちの抗日精神も二〇年代とは様相を異にする。旧文学者の中には、新文学者たちからの批判を受けて、貴族的色彩を払拭しようと努める者や、さらには台湾話文運動、郷土文学運動を支持して、民間文学の採録に力を入れたり、竹枝詞や郷土色の強い創作を試みたりする者があらわれるようになる。新旧文学の間には、対立の構図だけでは捉えきれない協力関係、影響関係があったのだと結論づける。

第三章 実践与転化——日治時代台湾

伝統詩社的現代性体験

本章は、詩社を社会現象の一つとして

位置づけ、詩社コミュニティの体験した「近代」について以下四点に論及する。第一、詩社の再興には、「新たな漢文による想像の共同体」を形成し、漢族の文化記憶を再確認し、いっそう強固なものとしようとする積極的な意義があった。第二、詩社の風雅は、日常生活の美意識やレクリエーション活動と結びつき、文化消費の一形態となった。新文学からの批判を浴びる一因ともなったのは、大衆化、通俗化した詩社によって創作される漢詩文が、廉価で瑣末な芸術と見なされたためである。第三、交通手段や時間が近代化されたことが詩社活動に影響を与え、詩会も旧来の集まりとは違う近代化された会合となった。第四、「新題詩」には「望遠鏡」、「飛行機」などのテーマが取り上げられた。これらの詩は近代ならではの新しい展開といえる。

第四章 另類現代性——『台湾日日新報』記者魏清徳的文明啓蒙論述

本章は、御用新聞だった『台湾日日新報』の記者として活躍した魏清徳の文明啓蒙デイスコースについて論じる。「新

文学」の文学者が文明の啓蒙の役割を担ったと一般的には解されているが、「旧文学」に属する魏清徳も新聞という大衆メディアを使って文明の啓蒙者としての一翼を担っていたこと、さらに魏清徳が日本語を学び、日本語を媒介として西洋を学び、現代西洋から来た文明を理解すると同時に、東洋の文明の存在を認め、伝統的な儒教文化を重視したことを指摘する。魏清徳が「近代化」を意識していたことを明らかにし、「もう一つの近代性(alternative modernities)」と称するに至る。

第五章 旧文学新女人——『漢文台湾日日新報』中李逸濤通俗小説的女性形象

本章は、『台湾日日新報』漢文版に連載された李逸濤の通俗小説における女性イメージを論じる。李逸濤の新聞小説四十六篇に見られる女性像を、「女侠」「女英雄」と、現実世界を生きる女性たち——母親、妻、娼妓に二分し、分析を加える。特に、前者の「女侠」「女英雄」に注目し、容姿は「女性」であることを

強調しつつも身体や知力は「男性」性をそなえた強い女たちを作者の理想的な女性像として描き出したことを説く。唐代伝奇小説以来の伝統的な俠女像や、俠女が救国救民に立ち上がるという晩清小説のモチーフの影響もないわけではないが、李逸濤の小説の女性像はそれらとは異なり、二〇世紀初期の「新女性」への期待とイマジネーションから造型されたものだとする。大衆メディア上の娯楽小説の中で造詣された「新女性」たちは、当時においては啓蒙教化に一定の効果があったことを認め、台湾小説史の一部でもある李逸濤の小説が、新小説の創出へと発展していった可能性を示唆する。

第六章 文学現代性的移植与伝播——台湾伝統文人对世界文学的接受、翻訳与摹写

新文学の台頭以後も、伝統文人たちは新文学の文学者と同様に、近代性の移植、伝播において一定の役割を担ったことを論じる。伝統文人たちが、中国、日本の古典、現代文学を初めとして、シェークスピア、デフォー、コナン・ド

イルなどの有名な作品を翻訳し、それを模倣したこと、また出版社を開設し、世界文学の著作を販売し、海外文学の移入に関わったこと、さらに西洋の詩や小説から多くを学び、創作にも改良を加えたことなどを明らかにする。加えて、伝統文化を重んじるがゆえに、文学の近代性と同調しきれなかった、伝統文人たちの限界についても説明を加える。

付録 帝国魅影——櫻社詩人王石鵬的国家認同

本章は、近代性と植民性の間で揺れ動いた伝統文人の事例として、櫻社に所属した詩人王石鵬の国家アイデンティティを論じる。櫻社は日本統治期台湾の三大詩社のひとつであり、従来の研究は、櫻社の抗日精神や民族意識という面を強調することが多いが、櫻社という詩社の集団が備えていた思想精神と、個々の社員の間では同一ではなかった。王石鵬は、日本人が文明の産物や制度を台湾に移入することを期待し、日本との同化が促進されることを支持した。彼は宗主国である日本への帰属感を強め、ついには

「皇民化」に同調していく。新学に打ち込んでいた王石鵬にとって、近代性の魅力はあらがいがたいものだったと分析を加えている。

以上、本書の各章について骨子を整理したが、大切な部分で遺漏があるかもしれない。本書に収められた論考は、チャレンジ精神に満ちあふれ、文学を核とした社会文化研究の豊かな世界に、読む者を誘ってやまない。各章とも、従来の研究を再検討し、改めて調査しなおし、多くの資料を渉猟して分析を加えている。新聞、雑誌などの当時の資料はもちろんのこと、子孫へのインタビューなども行っており、著者の調査の苦勞のあとが随所に見られ、その努力は敬服に値する。

陳培豊著『「同化」の同床異夢』（三元社）は、日本統治期の台湾人が「文明への同化」、「民族への同化」を選択的に受容したのだという点を教育の面から分析しているが、本書は「文明」を台湾人が導入し、受容し、普及させていく諸相

を漢詩文の中に見出した論著であり、他にないものとなっている。本書に登場する台湾の文人たちは日本の植民地支配を受けながら、自ら積極的に出版、翻訳し、文明の移植に努め、その一方で東洋文明への自覚に目覚めていく。その姿は、たくましく力強い。本書を通して、当時の文人たちの文明に対する高い意識、彼らを巻き込んでいった時代の熱気を感じる事ができる。例えば、付録に置かれた「帝国魅影」は従来の説をくつがえして心地よい。樺社は抗日精神の側面から評価されていた詩社であるが、参加していた社員の王石鵬は「近代化」を希求した結果、日本への国家アイデンティティを強めていたことが明らかになったのである。

また、まとまった情報をようやく得ることができた人物もおり、興味深かった。例えば、第四章を中心に分析された魏清徳はそのひとりである。

自分自身のことを記して恐縮だが、わたしは目下、鈴木虎雄と久保天隨という台湾体験を持つ近代日本漢詩人を主とし

て近代漢文学研究をすすめている。久保天隨は、昭和四（一九二九）年四月台北帝国大学教授となって台湾に居を移すが、転居後まもない五月二日、萬華の魏清徳を訪問している。魏清徳は台湾在住の日、台の文人たちを十名ほど集め、天隨の着任祝いの宴を設け、自ら「珍藏の書画数幅」を取り出し展覧してもらい（久保天隨「台北翰墨清興」『忘機餘話鈔』巻一）。魏清徳は日台の漢文化交流の要となる人物のひとりであることはまちがいない。けれども、『台湾詩史』（廖一瑾著、文史哲出版社）などでも記述が乏しく、魏清徳が日本人と交流を深め、『台湾日日新報』記者として、また漢文部主任としてどのような思いを抱いて、漢詩創作を続けていたのかわからないままだった。本書は、魏清徳について詳しい情報と新しい知見を提示してくれた。天隨は「大東亜」の漢文化を「ままとまり」として考えていたと推察しているが、魏清徳が「大東亜」を中華文明の広がりとして肯定したとすれば、天隨と魏清徳は漢文化の将来像について共感しあえる

ころがあつたと考えられる。台湾体験を持つ日本漢詩人とその思想についての考察を深めるためには、交流のあつた台湾伝統文人の研究は不可欠であるという思いを強くした。

しかしながら、黄氏の論述は、旧文学の新しさ、伝統との拮抗について、新文学との対比において把握することに重点を置き、漢文学の、保守的な面よりは革新的な面を、封建性よりは近代性(Modernity)を見出そうと努めているように思われる。そのため、漢文学の史的変遷という面から言うと、それ以前からの漢文学との対比において、何がどれほど新しいのかという点で説得力を欠くところがないわけではない。

ここに興味深い事例がある。幕末から明治にかけて活躍した漢詩人森春濤について、入谷仙介は「近代的詩情の水脈」(『近代文学における明治漢詩』研文出版)として位置づけたが、揖斐高氏は「伝統的な憂愁表現の前近代的な枠内での洗練」(『明治漢詩の出発』『江戸文学』第二一号所収)と捉え異論を唱え

た。入谷仙介は、新たに台頭する文学の前兆として森春濤を捉えようとしたが、揖斐高氏は逆に江戸期からの連続性の中で森春濤を理解しようとした。入谷仙介と揖斐高氏の試みは、近代漢文学を次代の文学からふりかえるのか、前時代の文学からの延長線上に捉えるのかによって大きな差異が生じることを表わしている。この二つの視角の存在は、近代漢文学を取り上げる際、注意しておくべきではないだろうか。

例えば第五章において、李逸濤の小説の女性造型は、「新女性」を念頭に構築されたという指摘がある。造型された女性に、唐代伝奇小説における謝小娥、聶隱娘など伝統的な俠女像や晚清小説中の俠女像の影響を指摘されているが、古典的な俠女像からどれほど脱却できたのだろうか。新しさは指摘されるが、過去から継承しているにちがいないことはほとんど指摘されないままなのである。漢文学は古典を取り込んで再生産を繰り返してきた文学表現である。古典を範とした類型的な説明や典故などを上手に使い

こなすことが、よりよい文学創作と評価されてもきたのである。近代漢文学の負の評価を払拭することに努めるあまり、新文学との対比にのみ傾き、伝統の継承についての言及がなござりになったように思われてならない。本書において、新文学との対比によって近代台湾漢文学を再考された黄氏が、次は前近代の漢文学との対比において考究を続けられることを期待したい。

また、本書が文化や社会との関わりなどを視野に据え、包括的な考察を展開しているためだろうが、個々の文学作品についてもう一步踏み込んだ分析が欲しいと思つたところがある。

本書には、「望遠鏡」、「飛行機」など近代を詠じた漢詩の例や「新女性」を詠じたという小説や探偵小説について事例が多々挙げられているが、事物、現象の近代性である。そのため、近代的思惟が文学作品の中でどのように表象されたか知りたく思つた。黄氏は、伝統文人たちが西洋文明を、東洋文明との対比、融合によって捉える様を分析している。その

分析が、文学作品と対峙する時にもっと活かされてもいいのではないかと感じた。さらに言えば、近代的な恋愛感情や近代的自我の葛藤などを、漢詩文はどのように表現しようとしたのかということについて、著者の意見をもっとうかがいたく思った。

また、伝統文人の言論の中に現れた台湾への言及つまり「本土性 (nativity)」については本書の中でも指摘されているが、漢詩に表象された「本土性 (nativity)」も、詳しく言及していただきたい点である。

黄氏も例示している黄遵憲(一八四八—一九〇五)は清末の外交官で日本に駐在し、『日本雜事詩』を作った。黄遵憲が近代化途中の日本の風物を描出したこととはよく知られている。日本漢詩の中にも「蒸気船」「ガス灯」など新しい風俗や事物を詠じた漢詩は多い。近代の新しい風俗や新たに訪れた異国の風景を詠じた漢詩人は、漢文化圏内ではほぼ同時に出現したことだろう。したがって台湾で「近代」を詠じる漢詩が創作されたこと

は自然なことで、突出した特徴とはいえない。「近代」の均質化した風俗や風景は漢詩を類型化させ、その類型化が漢詩表現の課題として意識されるようになった時、「本土性 (nativity)」に覚醒する漢詩人が現れるのではないだろうか。

第一章で言及される魏清徳の演説の中に、漢詩は数千年続き、作者は少なくないが、残念ながら国民性を表現した詩が無いという主旨の一文がある。(演説は一九一五年七月五日に「大正協会例会」で行われた。『台湾日日新報』同年七月八日号に例会の内容を紹介する記事が掲載されている。黄氏は上記記事を参照し、演説は「四月」に行われたとするが、もとの記事に「本月」と見えるので「七月」が正しい。また、黄氏の引用した記事に「表現」とあるが、もとは「表現」。現代の読者の便宜を考慮して引用の際に改められたものと思うが、注記がないのが惜しまれる。)

魏清徳が漢詩の無国籍性を実感していたというのは示唆的である。この魏清徳の言説を踏まえると、第二章で言及され

る竹枝詞創作や民間文学の採録に伝統文人たちが積極的になるのも理解しやすくなるのではあるまいか。

もつとも、漢詩に表象された「本土性 (nativity)」を敷衍して考えれば地域それぞれの郷土性、郷土意識の問題といえ、これは、近代アジア漢詩を考察するものにとつての大きな課題なのだと思われべきだろう。

本書は、近代アジア漢文学研究に一つのモデルを示してくれたわけで、その開拓者の功績は大きく評価されるべきである。

なお、著者黄美娥氏は台北の政治大学中文系教授で、台湾漢文学の研究と教育に従事して今日に至っている。彼女の執筆した「台湾古典文学史序説」は、中国文芸研究会発行の『野草』七四号(二〇〇四年三月)に翻訳されているので、本書とあわせて一読していただきたい。